

抽象表現主義芸術と感情

—ロスコ、ニューマン、スティールを中心に

大島徹也 (広島大学)

第二次世界大戦直後、アメリカに抽象表現主義が登場する。後期キュビズムの美学に限界が見え始めた時代の前衛画家として、キュビズム後の新たな絵画形式の探求を進めることは、抽象表現主義者にとって当然の前提であった。しかしながらそれだけであれば、絵画は彼らにとって薄っぺらなものになってしまう。そこには、芸術としての厚みを与える主題に対する独自の深い探求がなければならなかった。そう強く感じていた彼らは、新しい絵画言語を生み出し、そうでなくてはできないようなやり方で自身の主題の表現を為そうとした。そこにおいて彼らが特に関心を向けたのが「感情」の問題だった。彼らのさまざまな発言や著作を追っていくと、頻繁に「感情」という言葉が出てくるのに気付く。たとえばマーク・ロスコは1956年に次のように言っている。「私が関心を持っているのは、人間の根本的な感情——悲劇、恍惚、破滅など——を表現することだけです」。

ロスコは一つの画面上にいくつかのぼんやりとした矩形を浮かばせ、バーネット・ニューマンは色面の中に一本ないし数本の線条を垂直に決然と走らせた。クリフォード・スティールはペインティング・ナイフを用いて、輪郭においてもテクスチュアにおいてもささくれ立った色彩の広がりを描いた。彼らの絵画はいずれも、そのようなごく限られた範囲の抽象的な要素によって構成される。しかしそのことは、そこで表現される内容の「単調さ」を意味するものではない。彼らはそれぞれ、自分の個々の作品の間の色彩や形体、構図や空間性、サイズやスケール感等における差異を以って、表現したい内容を表現し分けた。そうしてロスコはいわば「感情そのものとしての絵画」を描き出していった。それに対しニューマンは、絵画の物質的な存在性を超え、形而上的な次元における感情表現を追求した。また、スティールは自分の個々の作品を日記の一頁のようなものと見なし、「人生の表明」としての絵画を描き続けた。

本発表ではロスコ、ニューマン、スティールという主要な三人の仕事を中心に、なぜ抽象表現主義者たちはそれほどまでに感情表現の問題に関わったのか、そして、どのようにして彼らはその表現を果たしたのか、また、その時彼らはその感情表現をどのようにして観者に伝えようとしたのか等について考察する。そうして、抽象表現主義以前および以後の他の芸術家たちの仕事とも比較しながら、20世紀半ばにアメリカに生まれた抽象表現主義芸術におけるその問題の特殊性を明らかにしたい。